人権作文

昨年度の阿蘇市人権作文集『かけはし』の作品の中から一部を紹介します。

皆さんもぜひ、家族や身近な人との関係を見つめ直し、人権や差別について話し合う機会を持ちましょう。

僕の過ち

阿蘇高等学校　二年（現三年）大津綺花（あやか）

以前、国語で『みどりのゆび』という作品を習った。その中で、とても印象に残った一言がある。『今まで嫌いだったすべてを好きになってしまってから初めて行くところがあるのだろう』というものだ。読んだ瞬間に、僕はあることを思い出した。

それは肺癌で亡くなった祖父のことだ。祖父の病気が分かったときには、余命は僅か半年だった。お見舞いに行くたびに、痩せていく体、祖母に支えてもらわないと満足に立つことすらできない姿を見て、だんだんと祖父を遠くに感じるようになっていった。僕の知らない祖父になっていくことが怖くて寂しかった。その理由なんて当時小学五年生の僕には少しも分からなかったが、祖父を避けるようになった。大好きな祖父を。車で隣に座るようなことがあれば、げんこつ一つ分程空けた。祖父が咳をすると少し距離をとった。祖父は癌にかかりたかった訳ではない。祖父には僕から避けられる理由なんて一つもない。得体の知れないものに侵されていく祖父を僕は恐れて、一緒に立ち向かうことから逃げた。

だいぶ前のことだが、僕はものすごく悔やんでいる。最近になって、祖父を思い出すことが増えた。そこで習ったのが『みどりのゆび』だった。その中の一文と同じようなことが僕にも起こっていた。

そのきっかけは、母から聞いた祖父の言葉だった。祖父は死ぬ何日か前に、自分の体を拭いてくれていた祖母に突然、

「ありがとう。」

と言った。祖母は涙をぼろぼろ流して、（もうお別れなんだな）と思った、ということだった。僕はこれを聞いたとき、凄く苦しくなった。（どうしてあの時。）このことばかりが頭の中でぐるぐる回って、心臓がぎゅうっとなった。でも、いくら泣いて謝っても僕の過ちが消えることはないし、この気持ちを一番に伝えたい人はもういない。

だから、もう繰り返さないと僕は誓った。僕はまだ子どもだし、弱いし、ダメなところもたくさんある。深く知ることを嫌い、自分に関係ないと思ったことには傍観者でいることも多い。そんな弱さだって持っているけれど、以前の僕の過ちのようなことはもう二度としない。自分の素直な気持ちをちゃんと伝えられる人間になりたいと思う。

平成二十一年度
阿蘇市人権作文集「かけはし」より

ＡＬＴ（英語指導助手）活動日誌

阿蘇の冬

一の宮中学校ＡＬＴ
ニコール　ランダ

早いもので、来月には小・中学校の卒業式を控え、今年度も終わりに近づいています。

私が阿蘇に来て２度目の冬を迎えますが、振り返ってみると、私は阿蘇に来てすばらしい体験ができ、とても幸運だったと思います。美しい自然に囲まれた街はすばらしく、四季折々の山々の風景を見ることを楽しんでいます。

そんな中で私がもっとも感動したことは、昨年の「阿蘇の火祭り」で、桜の花に囲まれた中で太鼓をたたいたことと、山に描かれた「火文字焼き」を見られたことです。私にとってはどちらも初めての体験で、とても印象に残る出来事でした。今年も参加できることを楽しみにしています。

また、今年は友人とともに阿蘇で新年を迎え、「正月」を過ごすことで、日本の文化を体験することもできました。

今年の冬ももうすぐ終わりを迎えますが、私は野焼きの後に新緑が芽生えた山々と、桜の花が咲きほこる景色を見ることをとても楽しみにしています。春の訪れが待ち遠しいですね。